

しいたずら

ESSAY

倉元信行

9

三面記事

着の身着のまま焼け出された私たち家族6人は、しばらくの間、同じ町内の4キロほど離れたところにある叔父の家にお世話になった。うちの本家に当たるところで、ここで父の弟である叔父は農業をやっていた。

夜尿症の気が長く続いていた私は、この時にも布団を濡らして恥ずかしい思いをした記憶がある。

ひと月ほどの後、私たち家族は福岡市内に借家住まいをすることが決まった。

これによって高校受験を目前に控えていた私は、その校区である県立福岡高校を受験することになってしまったのである。

ここは毎年九州大学に100名以上の合格者を出す名門校であった。地元の県立に行くつもりだったので、ろくな勉強もしていないが仕方が無い。私立はすでに募集を終えていたから、この受験しか残されていなかった。

もらった受験番号は1番だった。なんでも、中学校の美術の先生が知り合いの福高(ふっこうと呼ぶ)の先生に頼んでもらってきたのだそうである。

試験当日はよく晴れた寒い日だった。受験番号順に運動場に並んでいると後ろの方から、毎年1番は落ちるらしいという縁起でもない話声が聞こえてくる。

教室に入って、窓側の一番前の机で取り組んだ試験問題は幸いどの科目もそう難しいとは感じなかった。よし大丈夫だと、自分では納得した。

合格者は受験番号順に掲示されるので、発表当日、495名の中で真っ先に自分の名前を見つけることができたのだが、やっとの合格であることはすぐに思い知らされた。

入学直後に実施された国語、数学、英語、3科目の実力テスト結果は、クラス56人の中で後ろから6番目であった。福高ではすべての成績が親宛に郵送されてくる。成績順に生徒全員の科目ごとの点数が書かれ、上の10人は名前が書かれている。あとの氏名欄は空白で当人のところに先生が手書きで名前を入れて送るのである。

後ろから6番目に私の名前が書かれたそのガリ版刷りの紙を見て、本人以上に父ががっかりしていたのを覚えている。田舎の中学のトップクラスも県の名門校ではこんな有様だった。

私もこれでよいけないかと思ひ、少しは勉強に身を入れなければと観念した。

高校生活が始まって半年後の10月24日、私が16才になった日の朝のこと。化学の授業中に呼び出しを受け母が事故に遭ったと告げられた。

駆けつけた日赤病院での説明は、自転車で乗っていた母がバイクに轢かれて頭を怪我し、危篤の状態というものであった。

「助かるかどうか今夜がヤマです」

医者は宣言した。

中学校と小学校から呼び出され、妹と弟達もやってきた。

脳裏に焼き付いているシーンがある。

人影のほとんどない昼間の病院のロビーで、めそめそと泣いている妹と弟達が立っている。

「これからは一人一人が親に頼らず、自分たちの力で生きる事を考えよう」

肩を抱きながら私は言った。自分自身に言い聞かせた言葉だったかもしれない。

まるでお涙頂戴の安物劇だが事実である。

父はどこにいるのか所在がつかめなかった。たぶん職を探しに行くだけでも言って昼間から酒を飲んでいたのだろう。父の酒には散々泣かされてきた家族である。

夕刻になってやっと赤い顔をして帰ってきた父に、二つ違いの妹と私は二人で畳に手をついた。

「お父さん、お酒を止めて下さい」

泣いて頼んだ。父も泣いていた。

しかし約束した禁酒はそう長くは続かなかった。人に使われた経験が無く、せっかく決まった勤めもすぐに喧嘩をして辞めてくる父だった。四十を超したばかりの働き盛りなのに、病み上がりで職も趣味も無く、好きな酒に手を出したくなる父の気持ちは、自分がそつ一年になってみると良く分かる。

妹は「お酒を飲む人とは絶対結婚しない」と宣言してそれを実行した。

母の事故と私たち家族の事は、翌日、朝日新聞の三面記事のトップを飾ることになる。事情は次のようなものである。

母が事故に遭った時、たまたま朝日新聞社のY記者が居合わせた。頭からおびただし血を流している母を少しでも早く病院に運ばうと、Y記者は通りかかる車につぎつぎと協力を呼びかけた。だが誰も協力する者はなく、結局ずいぶん遅れてきた救急車まで母は放置された。

記者は怒りの記事を書こうとした。



ところが私の家庭について取材をし、父の病氣、火災による家屋の消失などの事を知ると、その記事は、次々と不幸に見舞われる生活保護世帯で唯一の働き手である母が危篤、というようなものになったらしい。

らしいというのは、私は新聞を見ていないからである。私のうちは西日本新聞を取っていた。

さっき妹と手をついてお酒を止めて下さいと頼んだ同じ四畳半の畳の部屋で、その夜、父と4人の子供はカメラのフラッシュを浴びることになる。

この写真が翌日のトップ記事となったのである。その年の新入社員教育を終えて、初めて市内廻りを命じられたY記者の初スクープ記事だったそうである。

皮肉な事に、人の冷たさを訴えようとしたY記者のこの記事は、世の中にたくさんの温かい心の持ち主がいる事を教えてくれた。

病院に、新聞社に、そして警察署などに多くの見舞金が届けられた。家に直接お金を送ってくれた方もいた。みんな匿名であった。

北九州のバスの運転手さんは、その日友達と飲みに行く予定を止めて、その金を近くの交番に届けてくれた。

妹の中学校の担任であったK先生は、職員会議で学校に募金箱を置く事を提案して多額のお金を集めてくれた。

中には死んだと思って香典をくれた母の友達もいた。

ここにしながら、

「一度死んだから長生きするよね」と言うのは母の口癖になった。

このように書くと、私たちがまるで暗い毎日を送っていたようだが決してそんな事はない。私たち子供4人は普通の学生生活を楽しんでいた。確かに貧乏だったのかもしれないが食べ物に困ったという覚えは少なくとも無い。

人は貧乏だから不幸になるのではない。朝起きた時に、今日はこれをするんだとか、今日は誰に会えるとか、小さくてもその日の目的や希望があれば幸せなのである。

コンボの難民の姿を見る時、私たちの心は痛む。しかしその子供たちが意外に元気で明るい笑顔をしている事に救われたような気持ちになる。彼らも目覚めた時に何か楽しい事を思い浮かべているのである。

それよ！先人はプライドを傷付けられた時に心を痛める。

小学校の時、隣の銀行員の息子が私のことを友達に「貧乏人」と言ったのを耳にした時には、みんなが自分をどういふ風に見ていないのかと思って悲しくなった。貧乏で何が悪い、なにをそとと思った。

高校生の時、母の内職しか収入の無い私たちの家庭は生活保護を受けていた。高校で奨学金をもらっているのはクラスでは私一人だったと思う。

授業中に、今から奨学金を渡すので取りに来て下さいという放送があり、ひとり席を立つ時の生徒の気持ちを事務員は分かっているのだろうか。

どうして昼休みにしてくれないのか。それは昼休みが自分の勤務時間ではないからだ。

心ないお役所仕事と一緒にいる。